



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第27主日 C年(2022年10月2日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：ハバクク書 1章2—3節、2章2—4節

第二朗読：テモテへの手紙二 1章6—8、13—14節

福音朗読：ルカによる福音書 17章5—10節

信仰を生きる

第一朗読：『ハバクク書』の冒頭に「預言者ハバククに示された神の託宣」(1章1節 フランシスコ会訳)とあります。ハバククについては預言者であること以外には何も知られていません。今日の朗読箇所を含む1章2-4節でハバククは、「主よ、わたしはいつまで助けを求めて叫んだらよいのですか」(2節 フランシスコ会訳)とあるように、人々を代表して神さまに向かって叫び、訴えかけます。ハバククによる1回目の訴えです。そして1章12節から2章4節までは2回目のハバククの訴えと神さまの答えとなります。

1章2、3節にある「いつまで」と「どうして」にこころをとめてください。ハバククが「いつまで」(アド・アーナー)、「どうして」(ランマー)と神さまに問いかけているのにはそれなりの理由があります。なぜなら「災い」、「労苦」、「暴虐と不法」、「争い」、「いさかい」という現実に対して、神さまが何もしていないように思えたからです。ハバククが登場する少し前、ヨシヤ王が断行した改革がありました。それは律法に基づく国のあり方を問い続けるものでした(申命記改革)。しかし、今やそれは無力化し、国の指導者たちは自分たちの利権に従って、ある者らはエジプトに組みし、ある者はバビロン(バビロニア)に服従していました。王の指導力は希薄となり、律法による神さまの統治にも人々が信頼していない現実の中でハバククは神さまに訴えたのです。

第二朗読：『テモテへの手紙一』が教会の秩序についての具体的な指示が示されているのに対して、『テモテへの手紙二』では司牧者として苦悩するテモテへの励ましが記されています。6節の「わたしが手を置いたことによって」は、フランシスコ会訳では「わたしの按手によって」となっています。「按手」は『テモテへの手紙一』4章14節にも登場します。初代教会ではその

人に聖霊を与え、特別な使命を持つ人を任命する時に按手が行われていました。

福音朗読：『ルカによる福音書』ではイエスさまがエルサレムへの旅をなさいますが、その旅は三つの段落に分けられます。「イエスは天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」(9章51節)で始まった旅は、「イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた」(13章22節)と第二段落に入ります。この段落ではイエスさまに従っていくお弟子さんたちの覚悟が語られます。そして今日の福音朗読の直後に「イエスはエルサレムへと上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた」(17章11節)とあって、旅の第三段落に入ります。今日の福音朗読の箇所はエルサレムへの旅の第二段落の最後の部分となります。

イエスさまは三つのたとえ話を続けてお話しになって、「一緒に喜ぶ」神さまの姿を伝えてくれました(15章：見失った羊、無くした銀貨、放蕩息子)。そして、お弟子さんたちに、お金を友人のために惜しみなく使えと教え(16章：不正な管理人)、さらには金に執着する人々には神さまのみことばに従えと教えました(16章：金持ちとラザロ)。そして、再びお弟子さんたちへのお話が続いています(17章：つまずき、罪のゆるし、信仰の力、取るに足りない僕)。

5節の「信仰を増してください」は印象深い一文です。今日の朗読箇所の直前で、つまずきをもたらす者は不幸だ(17章1-2節)、罪を犯した兄弟を赦しなさい(3-4節)とイエスさまは教えます。イエスさまの教えは厳しいものでした。だから、お弟子さんたちは信仰がなければこの教えを実行できないと考えたのでしょう。それで「わたしどもの信仰を増してください」(5節)と願います。「増してください」は「加えてください」がもともとの意味です。そうしますと、お弟子さんたちは自分たちには信仰がすでにあって、それを増し加えてください。強い信仰にしてくださいと願っていることとなります。

お弟子さんたちは、信仰が不足しているから兄弟の罪を赦すためには信仰が増し加われれば赦すことができるだろうと考えたのでしょう。ですから、「増してください」という願いとなりました。しかし、イエスさまはそうのように考えていないのかもしれませんが。信仰が薄いのではなく、そもそもお弟子さんたちには信仰がないと考えていたのかもしれませんが「からし種一粒ほどの信仰」があれば十分なのに、それすらないと考えていたのです。しかし、お弟子さんたちを傷つけるのを避けて、「信仰があれば」と語ったのでしょう。ここは直訳すると「あなたがたが信仰を持っているなら」となります。繰り返しますがお弟子さんたちは、信仰があると自負していたのです。

そこで6節は、お弟子さんたちに信仰がないことを批判する一文ではなく、むしろ「からし種一粒ほどの信仰」を獲得するようにと力づけ、励ます一文なのだと思います。「からし種一粒ほ

どの信仰」で十分だとイエスさまは言い切っているのです。

説教：信仰を生きる

第一朗読の末尾に「神に従う人は信仰によって生きる」(ハバ2章4節)とあります。預言者ハバククは「いつまで」、「どうして」と神さまに叫び、訴えます。これは信仰がないからではありません。神さまへの信頼があるからこそ、このような叫びが生まれるのです。神さまの答えは「待っておれ」でした(3節)。それは「待ち望みなさい」の意味であり、同時に「控えめに、待ち続ける、待機する」の意味でもあります。事実、ヘブライ語のハーハーにはもともとそのような意味があります。「待つ」ことは信仰を前提とします。それは「からし種一粒ほどの信仰」(ルカ17章6節)で十分です。しかも「待つ」ことは「命じられたこと」(9節)なのです。僕が、主人の食事が終わるのを待つように。「信仰」をもって「待つ」ことができた人は「取るに足りない僕です」(10節)と言います。ギリシア語でアクレイオスと言いますが、これは「役に立たない」という意味ではなく「価値がない」という意味です。「待つ」ことができたのは、自分の働きではなく、神さまの働きに由来するからです。ですから、僕はしなければならないことをしたにすぎないのです。



「ハバククと天使」

ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ 1656年-1661年 サンタ・マリア・デル・ポポロ大聖堂